12 月 12 日のメッセージ

聖書：イザヤ書　40：　1 – 11

「声をあげよ、恐れるな」

信仰に生きる者たちは、神の言葉を語り続けた先達たちの背中を追いかけ続けてきました。厳しい中でも神の言葉に聞き、語ってきました。それは、主の道を備えるためです(「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。」イザヤ書 40:3)。

たしかに世界は神を神ともしない者たちで溢れています。たとえ神がこの地上に来られたとしても受け入れないでしょう(「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」ヨハネによる福音書 1:11)。その意味で、この地上は荒れ野と言えます。それは種が蒔かれても大きく成長しない土地です(「ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。」マルコによる福音書 4:5-6)。

しかし、たとえ可能性が低くとも、神は種を蒔き続けられます。荒れ野に道を通せと呼びかけられます。その道は神の道です(「正義は御前を行き／主の進まれる道を備えます。」詩編 85:14)。その道を通る者には限りない恵みと平和がもたらされます(「主を畏れる人に救いは近く／栄光はわたしたちの地にとどまるでしょう。」詩編 85:10)。荒れ野に花が咲き、喜びで満たされるのです。

もちろん、神はご自身でその道を通すこともおできになるのですが、その方法を選ばれません。代わりに、その道を備えるために神は人を遣わされます。その呼びかけに応えた一人が洗礼者ヨハネです(「そのとおり、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。」マルコによる福音書 1:3-4)。ヨハネは自身も荒れ野に暮らしながらその時に備え続けました。言うまでもありませんが、荒れ野に道を通すことは容易ではありません。事実、ヨハネもその働きの途中で命を落とします(「そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね(た)」マルコによる福音書 6:27)。志半ばで彼の命の道は閉ざされました。

しかし、彼が開いた道は、その死によって閉ざされることはありませんでした。荒れ野で叫び続けたヨハネの声に応えた人々は救い主の到来を期待しながら待ち続けました。そして、ヨハネが開いたその道を通ってイエスが来られたのです。

私たちも今、様々な困難が待ち受ける荒れ野に生きています。長いトンネルの出口はまだ先のように思えます。そのような中で私たちは、イエスが再び来られる時を待っています。その時が来るまで、全てを受け止めながら待ち続けています(「だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい。」ペトロの手紙二 3:14)。

約束の時は近づいてきました。少しずつ希望の明かりは大きくなっています。今、私たちもヨハネと同様に道を備える働きに招かれています(「高い山に登れ／良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ／良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな／ユダの町々に告げよ。／見よ、あなたたちの神」イザヤ書 40:9)。「声をあげよ、恐れるな」。先駆けとして共に道を切り開いて参りましょう。